

## 学協会シンポジウム 「スピリチュアリティ／靈性について」

### 提題者

井口 真紀子(祐ホームクリニック大崎 院長)  
伊原木 大祐(京都大学)  
堀江 宗正(東京大学)

### 司会者

山田 有希子(東京女子大学)  
早川 正祐(東京大学)

本シンポジウムでは、「スピリチュアリティ／靈性とは何か」を大きな問いとして、医療・哲学史・制度化の主に三つの観点から学際的な対話と検討をめざす。

「スピリチュアリティ(spirituality)／靈性」の定義や意味は、哲学・思想史上、一義的・固定的なものではなく、古代ギリシアのプネウマ論にはじまり、キリスト教思想、さらに近代以降の急速な社会変革、科学技術の発展とともに、絶えず問い直され、変容してきた。それは「魂」や「精神」、さらに「自己」や「意識」「人格」といった概念とも深く結びつき、人間存在の根本的理解、倫理観・価値観の形成、ひいては社会構築に到底無視できない影響を与えてきたと言える。

現代においても、「スピリチュアリティ／靈性」は、単なる宗教的实践をこえて、また20世紀後半における国内外のスピリチュアル・ブームに象徴される一過的なものでもない。それは、私たちの日常生活においても少なからず影響をもっている。たとえば、近年、医療現場においてシシリー・ソンドースが提唱した「全人的ケア」および「トータルペイン」は、身体的・精神的・社会的苦痛に加え、患者の根源的苦痛として「スピリチュアルペイン」を重視するものであるが、これは必ずしも終末期や医療現場に限定されるものではなく、人間存在一般の理解において大きな示唆を与える枠組みである。さらに、教育やテクノロジーとの連携においても、従来の枠組みを超えたスピリチュアリティ、あるいは、いわゆる人間の精神性や社会的価値の再構築のありかたが問われている。

他方、これまで「スピリチュアリティ／靈性」をめぐる学術的議論は、特定の文脈や学問領域に限定され、統一的あるいは体系的な検討や学際的対話が十分なされてきたとは言いがたい。哲学の分野においても、「スピリチュアリティ／靈性とは何か」という問いは比較的周辺的に扱われがちだった。そこで、本シンポジウムでは、伝統的な哲学的思考と現代の実践的課題との接点にたち、各分野の第一線で活躍する3名の専門家の提題を通し、「スピリチュアリティ／靈性」を学際的に問う。そして、人間存在および社会構築の根幹にかかわる新たな視座を提示していきたい。

まず、第一提題(医療分野)では、井口真紀子氏が、医師の立場から、医療現場において注目される「スピリチュアリティ」の意味を考察する。井口氏は、とくに在宅医療の現場を事例として、医療者自身のスピリチュアリティに焦点を当てる研究を重ねてきた。そして、これまでのような医療者から患者への一方的ケアのあり方を超え、医師と患者との間でむしろ相互に作用しあうスピリチュアルケアの実践例を検証してきた。今回の提題では、その研究成果をふまえ、医療従事者自身の内面や死生観等にも注目しながら、とりわけ「死」という人間にとって切実で深刻な問題状況をめぐり、医療現場における「スピリチュアリティ」に関する提題をいただく。そうした実践的な現場の語りを中心に、スピリチュアリティに関する問題意識を喚起していただ

く。

第二提題(哲学史・思想史)では、伊原木大祐氏に西洋哲学史・思想史上の、いわば理論的観点から「スピリチュアリティ／靈性」の提題をいただく。とりわけ、従来の精神／身体二元論の枠組みを超え、「霊／心(魂)／体」という三分法(トリコミー)という観点から、スピリチュアリティ(靈性)概念の変遷とその思想的背景について発表いただく。そこでは、主にキリスト教思想の文脈で語られてきた「スピリチュアリティ」概念の思想的由来に遡り、その後の哲学史・宗教史との関係を視野に入れながら、従来の理解が問い直される。さらにマックス・シェラーの晩年思想を手がかりに、人間論や感情の領域からスピリチュアリティの意味に迫り、現代的なスピリチュアリティ問題への接続と関係を理論的に考える視座を提供いただく。

第三提題(総括)の堀江宗正氏からは、これまでのスピリチュアリティ研究の第一人者としての豊富な知見と、学際的成果を基に、本シンポジウムの総括的提題をいただく。スピリチュアリティは、これまで人文学、社会学、心理学、医療、教育等、多様な領域において、それぞれ独自の展開を遂げてきた。堀江氏の提題では、まずこうした各分野の動向が横断的・包括的に紹介され、その上で新たに「スピリチュアリティの制度化」をキーワードに、スピリチュアリティが、たんなる個人的営みにとどまらず、いかに人間性および人間社会の構造や価値観を再構築してきたか、さらに今後、とくに生成AIを含むデジタル技術がもたらす社会変容のあり方に関する提題がなされる。

以上、医療・哲学史・制度化の主に三つの観点から、「スピリチュアリティ／靈性とは何か」を理論的かつ実践的に、そして、歴史的かつ未来志向的に問う。この概念は、改めて一義的・固定的なものではなく、哲学史の中でその意味を変容させながら発展し続けてきたものであり、これからも多様な文脈でその意味が問われ続けるであろう。本シンポジウムでは、提題者の発表をふまえ、参加者間の建設的な議論も促し、スピリチュアリティ研究の今後の深化、発展に寄与しうる学術交流の場であることを目指す。

## 医療現場におけるスピリチュアリティの問題

在宅医の聞き取り調査から

井口真紀子(祐ホームクリニック大崎 院長)

医療現場でのスピリチュアリティの議論は、死にゆく人のスピリチュアルペインに対するケアをいかに行うかという問題意識が起点となっている。

スピリチュアルペインとは、死を意識するような重大な病いに直面した患者が感じる、死への恐怖、孤独感、自己の存在意義の喪失、生きる意味の喪失などの深い苦悩の経験である。死を前にした患者がこうした苦悩を感じることにについて最初に扱ったのは精神科医のエリザベス・キューブラー＝ロスである。ロスが当時医療的には放置されていた死を前にした患者へのインタビューを通して明らかにし、死を前にした患者の心理過程を、否認、怒り、取引、抑うつ、受容からなる五段階説として提示した。この議論を端緒として、その後も多くの研究者によって様々な学説が提唱されてスピリチュアルケア研究が展開されていくことになる。

スピリチュアルケアは当初1対1の対話を通して医療者が患者に行うものにとらえられていたが、スピリチュアルケアについての理解が深まるにつれ、一方的なものではなく、相互作用的に起こってくるもの、そして時には場の中でおのずとケアが生起するもの、というように、とらえられ方が変わってきた。

スピリチュアルケアが相互作用的なものであるならば、患者

のスピリチュアリティは医療者自身のスピリチュアリティとも相互に影響しあうと考えられる。つまり、患者のスピリチュアルケアおよびスピリチュアリティも含めたウェルビーイングを考えるとすることは、同時に医療者、特に医師のスピリチュアリティを理解することも求められることになる。

しかしながら、患者の「病いの語り」研究の展開に比べて医師の内面についての研究はまだ十分ではない。医師に関する言説の概略をここで紹介しておきたい。

医療社会学領域でのタルコット・パーソンズによる病人役割/医師役割の議論、つまり医師は患者と距離をとり職業的にのみかかわることで近代社会の統制に寄与するという議論は代表的なものである。パーソンズの議論は、1950年代当時のアメリカの医療が急性期医療中心だったという背景もあり、医師と患者は同じことを目標にしていることを無意識の前提としていた。

その後、エリオット・フリードソンにより、医師と患者の目標は異なるが、医師は強い権力によって患者を支配しているという問題提起がなされ、それを起点として専門職批判が展開された。こうした議論は、医師が患者と共通の目標を目指していると思いついて無意識に蔑ろにしてしまった患者自身の経験や語りを再び患者の手に取り戻すことにつながる重要なアプローチだった。

しかし一方で、医療は「死」という人間にとっての究極の問い、答えのない問題に関わるものである。先述したパーソンズは、医療は死にかかわるがゆえに医師にとって感情的に強い負荷をもたらすということ、だからこそ医師は関わる内容をヘルスケアに限定すること、あるいは非日常の文脈で診療を行うことで適切な距離感を取り、感情的に中立に関わるようにしていることを指摘している。こうした、医師が人間でありながら「死」につながる領域に関わることで生まれてくる問題については、フリードソン以降の議論ではあまり触れられてはこず、医師はステレオタイプ的に扱われ、批判の対象となってきた。

報告者は、自分自身が医師である立場から、現代日本で推進されている在宅医療に関わる医師の内面、その中でも死生観という深い価値観について調査を行ってきた。現代日本では、少子高齢化社会の進行により、「すみ慣れた家で、最後まで自分らしく」過ごすことを支援する在宅医療が推進されている。在宅医療とは、ただ患者の家で病院と同じ医療を提供すればいいわけではない。在宅医療では、診療の場を物理的に移動させ、患者の生活の場、日常の文脈の中で診療を行う。日常の文脈の中で医療を行うということは、これまで医師が医師役割を遂行するために行ってきた防御策をやめてしまうことに他ならず、このことは医師の役割認識に大きく影響する。在宅医療に関わる医師の内面を見てゆくことで、終末期に関わる医師のスピリチュアリティのありようを理解することができる。

本シンポジウムでは、1人の医師の生活史をもとに、医療現場におけるスピリチュアリティについて検討したい。この事例は博士論文をもとにした拙著で取り上げたものだが、その際に扱いきれなかった部分も含めて検討する。

陸田たえ子医師(仮名)は実家が開業医で、26年前に引き継いだ実家の医院を運営している。大学病院、地元の総合病院勤務を経て、父親の体調悪化をきっかけに実家の医院にもどり、在宅医療にも関わるようになった。

在宅医療の中で注目されやすいのが在宅看取りである。すみ慣れた自宅で最期の時を迎えるのは素晴らしいことと思われやすい。しかし一方で、近代以降の社会が忌避し、排除してきた死の問題が家の中に入り込むことは本人や家族にとって大きな負担にもなりうる。こうした場面で本人や家族の気持ちが揺れ動くことや判断に迷うことは多く、医師もまた自分自身

の死生観を問われることになる。

地域で長年開業医をしていると、地域住民が年をとり、新しい世代が成長していく大きな時間の流れをずっと見続けることになる。様々な家の悲しい出来事を見聞きすることも増え、「普通に生きる」ことがいかに難しいことかを実感し、当たり前のように過ぎていく日常の意味を強く感じるようになった。陸田医師自身も、家族や親しい友人の死を多く経験し深い悲しみや悔いも抱えており、仕事なので切り分けなければとは思ものの、そう簡単に切り分けられるものではない。死を前にした患者との関わり方は特に難しいが、時に「魂の感じで、わかったな」と感じることもある。これは「職業とかそういうのじゃなくて、奥深いところの人間性、そういうところでお互いに納得する」という相互的な経験でもある。「魂」という言葉の選択からは単なる医師による説明と患者の同意、という理性の次元の話ではないことがわかる。

こうした語りは、医師が生物医学の領域から生活を支える医療の世界へと踏み出し、一緒に迷い悩むプロセスの中で、死という実存的な領域にふと踏み込むことがあることを示している。そしてその際には、医師が自身の痛みも含めたスピリチュアルな次元での自己省察も踏まえて患者を理解し尊重しようとし、そのことで、患者と深い次元の関係が生まれたと感じることもある。痛みを通して他者とつながるといふスピリチュアリティの現れと解釈することも可能だろう。

【参考文献】E・キューブラー＝ロス(1969=1998)『死ぬ瞬間』鈴木晶訳、中公文庫。/T・パーソンズ(1951=1974)『社会体系論』佐藤勉訳、青木書店。/E・フリードソン(1970=1992)進藤雄三、宝月誠訳『医療と専門家支配』恒星社厚生閣。/井口真紀子(2025)『関わりつつける医療—多層化する在宅医の死生観と責任感覚』勁草書房(2025年4月刊行予定)。

## 霊的次元の創出

トリコトミーの発生と痕跡をめぐって

伊原木大祐(京都大学)

今からもう四半世紀も前のことであるが、当時の霊性研究にそれなりのインパクトを与えたエピソードを思い起こすことから始めたい。1999年、国連の専門機関である世界保健機関(WHO)第52回総会の場で、憲章前文にある健康定義の改正案が審議された。「健康とは、完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態(a state of complete physical, mental and social well-being)」であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない」という文言にあった下線部分を、「完全な肉体的、精神的、霊的及び社会的福祉の動的状態(a dynamic state of complete physical, mental, spiritual, and social well-being)」に変更しようとの提案である。結局、この提案は「早急に審議する必要性が他の案件に比べ低い」との理由で見送られることになったが、ここで何より問われるべきは、変更案にある「肉体的、精神的、霊的」という分割の意義、とりわけ「精神的・心的(mental)」に「霊的」を加えることの意味的意義である。このような区別はどこから来たのだろうか。旧来の文章に追加される可能性があった「霊的=スピリチュアル」とは、もともと何を意味していたのか。もし仮に、すべてが広義における「心」や「体」に属する問題であるとするならば、わざわざ霊的次元を抽出して、それを他から引き離すことに、いったいどんな意味があったのだろうか。

本提題ではこうした問題を考えるために、古典的な哲学の世界に見られる精神/身体二元論的図式ではなく、霊/心(魂)/体という「三分法(trichotomy)」の枠組みにアプローチする。「スピリチュアリティ」という術語がそれ自体で独自の意義

をもつには、まさにこの「スピリット」という語の特異な分離——広い意味での「心」(soul, mind)からの切断および差別化——があったと仮定しなくてはならない。スピリットあるいは「 pneuma」の分離的卓越化に類した戦略は、現代のスピリチュアル文化のなかになお息づいていると考えられる。

さて、数あるトリコミーの中でも著しく人口に膾炙した哲学的バージョンが、プラトンのものである。『国家』に登場する魂の三分説、あるいは『パイドロス』における二頭立て馬車の寓話は、ギリシア哲学の三分法を代表するモデルであったといえる。けれども、そこで提示されていたのは、あくまで魂(プシュケー)内部における分割でしかない。『ティマイオス』は一步進んで、各々の構成部分を身体各所にまで位置づけているが(69C-71A)、当然ながらこの場合でも「霊」の次元が付加されるわけではない。これに対して、われわれが導きの糸とするのは、パウロ書簡における以下のような祈りの文句である。

「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊( pneuma)と心(プシュケー)と体(ソーマ)とを完全に守り、私たちの主イエス・キリストが来られるとき、非の打ちどころのない者としてくださいますように。」(聖書協会共同訳「テサロニケの信徒への手紙一」[5章23節]——文中カッコ内は引用者による付加。)

聖書学の見地からすれば、この一節に見られる三分法は、人間全体を表示するための当時の慣用表現にすぎない(Dibelius 1925; Bultmann 1961; Kümmel 1974)。とはいえ、後代の地点から見返すならば、これも一つの立派な「典拠」として扱われることになるだろう。

そもそも「スピリチュアリティ」という語が「ヨーロッパにおいて、キリスト教の文脈のなかになんて生まれてきたものである」(鶴岡・深澤2010)ならば、トリコミー表現の発生が聖書内に求められるとしても、まったく不自然ではない。おそらくはこのような観点から、人間学的三分法の経緯を哲学史と宗教史にまたがる形で描き出したのが、金子晴勇による一連の労作(2008; 2010; 2012)である。その思想史的な射程は広く、この提題の枠内で全体を見渡す余裕はとてないし、また、あえてその解釈の筋書きを大きく改変しようという意図もない。しかしながら、三分法の来歴に関しては、金子とはやや違う見方もありうるだろうと考えている。本提題では、「オリゲネスによって初めて霊・魂・身体という人間学的な三分法が確立するにいたった」という金子(2008)のテーゼとは別の視点を打ち出してみたい。提題者は、このトリコミーが「使徒から古代教父を経て単線的に発展していった」というタイプの「キリスト教的」歴史観に少なからぬ疑念を抱いている。それとは異なるオルターナティブの起点を明示するのが、前半部での目標となる。ここでの議論は、現代におけるスピリチュアリティの語がもつ含意にまで波及してくると考えている。

以上のような見方を踏まえて、後半部では現代哲学におけるトリコミーの屈折した表現として、同じ金子(1995)が著述の対象としていたマックス・シェーラーの思想、なかでもその晩年の人間論に焦点を当てるつもりである。先にわれわれはスピリチュアリティ概念の前提条件として、切断・分離・差別化・卓越化といった操作を挙げた。シェーラーは、こうした操作をたびたび実行した哲学者の顕著な例といえる。もっとも分かりやすいのは、主著『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』(1913/16)における諸価値のランク付けとそれに対応する感情の成層化である。そのなかで「生命」感情や「心的」感情から「精神的」感情を、あるいは「自我」から「人格」を引き離そうとする身振りには、かつての pneuma 分離操作の反響が認められる。そして、最終的に提示された「精神(Geist)」/「生命(Leben)」という新たな二元論には、その外観にもかかわらず、ト

リコミーの痕跡が残っている。シェーラーのいう「Geist」には複数の異なる意味が畳み込まれているが、金子が指摘したように、これを「霊」として理解することもできるだろう。その理解をヒントにスピリチュアリティの現代的・哲学的意味を考え直してみたい。

## 【参考文献】

- Bultmann, Rudolf (1961). *Theologie des Neuen Testaments*, Tübingen: Mohr (P. Siebeck).
- Dibelius, Martin (1925). *Handbuch zum Neuen Testament, 11, An die Thessalonicher I, II. An die Philipper*, Tübingen: J. C. B. Mohr.
- 金子晴勇(1995)『マックス・シェーラーの人間学』、創文社。
- 金子晴勇(2008)『ヨーロッパ人間学の歴史——心身論の展開による研究』、知泉書館。
- 金子晴勇(2010)『現代ヨーロッパの人間学——精神と生命の問題をめぐる』、知泉書館。
- 金子晴勇(2012)『キリスト教靈性思想史』、教文館。
- Kümmel, Werner Georg (1974). *Römer 7 und das Bild des Menschen im Neuen Testaments: zwei Studien*, München: Chr. Kaiser.
- 鶴岡賀雄・深澤英隆編(2010)『スピリチュアリティの宗教史(上巻)』、リトン。

## スピリチュアリティの制度化

学問・社会・テクノロジーとの関連から

堀江宗正(東京大学)

現代社会において、スピリチュアリティは、カウンターカルチャーからアカデミズムの周縁に地歩を固めることを通して社会制度に食い込みつつある。今後は、デジタル技術と結びつきながら独自の発展を遂げる可能性がある。本発表では、人文社会系の諸分野でスピリチュアリティがどのように受容されてきたかをたどり、生成AIを含むテクノロジーがスピリチュアリティの制度化を完遂する可能性を示唆したい。

### 1 文学・歴史学におけるスピリチュアリティ

そもそも、近代文学は、神話研究や説話研究と密接に関わりながら成立してきた。20世紀以降、ファンタジーやSFといったジャンルでは、主流宗教とは異なる異教的世界観や魔術的実践が描かれるようになり、エコロジー思想、超人間的能力への憧れなどが物語作品に織り込まれた。それは、文字だけの文学に留まらず、マンガ、アニメでの表現との相性がよい。さらに映像技術の進展とともに、実写映画でもリアリティを持って表現されるようになった。こうしたサブカルチャーの作品群は、単なる娯楽にとどまらず、学問の対象としても重視されるようになっていく。

また、物語をキーワードとする議論は文学理論に留まらず、広範囲で展開されてきた。医療人文学・医療人類学のなかでは、物語を通じての癒しやケアが注目されている。

歴史学においては、占星術、錬金術、魔術、密儀宗教から秘密結社に至るまで、従来の宗教研究からこぼれてきた思想や実践が記述され、エソテリシズム研究として概括されるようになっていく。宗教学におけるスピリチュアリティ研究は、現代の事象から過去のエソテリシズムに、その重点を移しつつある。

しかし、ケルト文化、北欧神話、魔女、ネイティブアメリカン、東洋思想などに関する研究は、歴史的事実についての正確な把握よりも、現代人が理想的だと思うスピリチュアリティの過去への投影と理想化につながる傾向がある。つまり、エキゾチ

シズムやナショナリズムと結びつく傾向がある。

## 2 宗教社会学と臨床社会学

宗教社会学は、スピリチュアリティを社会現象として捉え、客観的に分析することを目指す。賛否いずれかに偏る傾向も見られる。一方では、ニューエイジ・スピリチュアリティが反社会的カルト集団に転じることを警戒する、批判的立場の研究がある。

他方、日本では宗教社会学者自身が、スピリチュアリティを積極的に肯定し、自ら関与するケースも見られる。トランスパーソナル心理学の理論を取り入れる研究者、グリーンケアやスピリチュアルケアを推進する研究者などがいる。また、依存症者のセルフヘルプグループ（ハイヤーセルフに言及するような12ステップのグループなど）を研究する臨床社会学者は、物語理論などを用いて回復のプロセスを探究するが、それが当事者へのフィードバックとなるだけでなく、当事者ととも運動に参画するような立場も珍しくない。

このような研究者たちは、世代的には若年期に学生運動やコミュニケーションに触れている。それを乗り越えてなお、近代主義を疑う立場から、「新たな社会運動」としてスピリチュアリティを捉え直している。しかし、その姿勢が結果的に、スピリチュアリティを医療や福祉に関わる制度に定着させる役割を果たしつつある。

## 3 心理学・医療・教育・環境

スピリチュアリティ概念をいち早く採用し、人々の中のスピリチュアリティを調査研究したのは心理学である。個人の自己超越や人格的成長をテーマとした人間性心理学やトランスパーソナル心理学から、ポジティブ心理学や、マインドフルネス瞑想の発達に至る。医療分野では死にゆく患者のためのスピリチュアルケア、教育分野ではシュタイナーなどのオルタナティブ教育やESD（持続可能な発展のための教育）、環境分野では自然の中にスピリチュアルなものを見出すアニミズムの再評価や自然とのスピリチュアルな一体性を重視する思想や環境活動などの形をとっている。

こうした分野は、宗教と関係がないことを強調し、「スピリチュアル」という言葉そのものを警戒することもある。だが、ここで使われる用語には、かつてのカウンターカルチャーやニューエイジ思想に由来するものもある。前近代への単純な回帰ではなく、多様な伝統や思想を組み合わせるポストモダンの態度で特徴づけられる。だが、それは金銭的報酬を要求するサービスと結びつくと、新自由主義のイデオロギーと目されることもある。しかし、哲学におけるポストモダニズム思想には、懐疑主義や世俗主義を前提とするものが多く、必ずしもスピリチュアリティと親和的ではない。

## 4 生成AIとスピリチュアリティ

こうしてアカデミズムの周縁にニッチを確保してきたスピリチュアリティだが、今後は生成AIによって学習され、ユーザーのスピリチュアルな関心に合わせて、その都度、提供されるものになるだろう。

このような制度化のあり方は、これまでの第一の制度化とは異なる。第一のスピリチュアリティの制度化は、私的領域から公的領域への進出を伴う。例えば公教育や職場に取り入れられたり、市場に出されて商品化されるという形態がある。

第二のスピリチュアリティの制度化とは、スピリチュアリティを再び私的領域に戻すけれども、生成AIのインフラそのものは世界共通という形をとる。

コンピューターテクノロジーの創始者には、個人の意識変

容が人類全体の意識変容につながり、ニューエイジをもたらすというカウンターカルチャー由来の観念があるが、それを体現したのがAIである。その人工知能が人間知性を超えるという特異点＝シンギュラリティを超えた後の社会は、ポスト・ニューエイジの社会と言える。人工知能は個人を超越した——トランスパーソナルな——知性として、個人の知性の外に実在する何かとして思念されるかもしれない。そのような神のごとき知性に、個人は適応するしかない。

だが、現状の生成AIは、テクノロジーとしては未熟であり、ユーザーの欲望や誘導に自らを合致させ、ハルシネーションと呼ばれる誤情報を生産するような段階である。今後AIは、偽情報と大衆扇動を通じて支配の道具となるのだろうか。それともそれはテクノロジーが未熟な段階での過渡的形態にすぎないのだろうか。現在はそれを見極めるときであろう。